

セミナー通信

—教育実習総合センター—

P2生へ

リフレクション
セミナー修了後、
遠慮なく
当センターへ



いつも笑顔で
お迎えします。

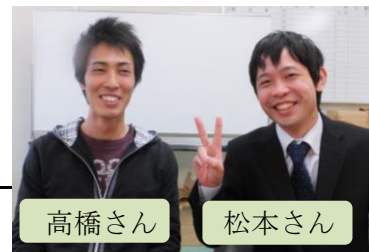
「何を学んだか」ではなく 「何を身につけたか」

新編集委員が動き出した。P1生は一番の関心事である「教授対策」を、P3生は採用前研修として「授業力」をテーマに初取材した（P2生は事務局が編集）。これら諸テーマに共通する課題は、「何を学んだか」ではなく、「何を身につけたか」という実践力を高めることである。

今年も余すところ半月程。先輩方の勇姿を見ている私たちも、教員採用試験に向けて動き出さなくてはならない時期を迎えた。

そこで、この度神奈川県の中学校教員（数学）に合格された松本哲直さんと、神戸市小学校教員に合格された生徒指導実践開発コースの高橋圭さんを迎え、合格の秘訣等について語っていただいた。（以下、松本さん＝M、高橋さん＝Tで表示）

高橋さん＝Tで表示
教授対策を振り返って
M 「時間管理が大切。忘れてしまうので、仲間と大学に来て、時間を決めて取り組んだ。特に教職教養に重点を置いた」
T 「広く見通しながら、ポイントを勉強した。踏み込んだことのない」



高橋さん

松本さん

M 「よく声が小さいと指導を受けた。そこで、『教師は演者であれ』という適切な助言を受け、友人と市の劇団に入り、自己改革を実践した」
T 「当初は自分に自信がなく、面接対策のセミナー参加を渋っていた。でも一度参加してアドバイスを受けたら、悩んでいた回答が見つかるようになった」

M 「教師になりたい思いを強く持つて臨むこと。その思いは、部屋に入った瞬間、面接官は見抜いていると思う。体からやる気を湧き立たせることが大切だ」
T 「どんな子ども育てたいのか、先を見据えた教師の見識と自信を持つて臨むことが大切だ」

面接本番での心構えは？

ジャンル（教職教養）から取り組み、苦手を埋めることから始めた」
特に、面接対策は？
M 「自治体の情報を集め、なぜその自治体を志望したのかを明確にした」
T 「自分を知らずに主眼をおき、続いて過去問から自分に合う問題を選び、的確に回答できるように準備した」

お世話になっています —実習校訪問—

11月18日から始まった実地研究Ⅰが3週間余り経過した12月上旬。5人のコーディネーターはそれぞれの実習校を訪問し、管理職の方から、頑張る院生の様子取材してきました。

P2 編集委員
内井佑花さん

【実践のようす】



岩見一輝さん



仲宗根千佳さん



重宗俊輝さん



園田浩之さん



島本勇希さん



福本翔太さん



迫田佳大さん



眞山貴彰さん



馬越浩彰さん

- ①出勤・帰宅時、管理職や職員に挨拶が出来、気持ちがいい。
 - ②真摯な実習態度に、職員も大変快い刺激を受けている。
 - ③毎朝陸上の練習に参加し、メンターと共に頑張っている。
 - ④出勤後すぐ校門に行き、全校児童に明るく挨拶している。
 - ⑤毎放課後教室を清掃し、机や椅子の整理整頓をしている。
 - ⑥危機管理として、すぐに通学路の危険箇所に出向き、偶然出会った保護者とも積極的に話ができています。
- ※①②は全P2生に共通。③～⑥は特に顕著な実践事例。

【勤務のようす】

T 「どんな子ども育てたいのか、先を見据えた教師の見識と自信を持つて臨むことが大切だ」
**やる気のオーラ
アピール**
今回、お二人の話に共通していることは、①対策は早めにとること。
②何で教師になりたいのか、具体的な自分信を持つてアピールすること。
③今の時期から自分の苦手な部分を直し、改善す

る努力を怠らないことの三点だった。取材を通し、お二人から「教師になる自信、やる気のオーラを放つアピール力」を感じることができた。松本さん、高橋さん。ご協力ありがとうございました。（坂本真理子）

採用直前の 悩み克服コーナー

小コースの私たちP3生は、連携協力校とメンターの先生の指導を受けながら、年間6時間以上の実習（インターシップ）でお世話になっている。今回は、その連携協力校の一つである加西市立日吉小学校の服部英雄先生（教職歴二十八年目）を訪ね、「授業力の向上」について、具体的なアドバイスをいただいた。（以下、服部英雄先生の助言をまとめてみた）

P3

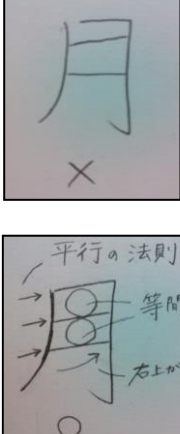
見やすい板書づくり

「見やすい板書」のコツは、次の3点である。

- 1 字形。字の大きさを書く。
- 2 チョークの色。教科書の本文は白色、児童の考えは黄色など目立つ色を使う。
- 3 構造的な板書。初任時は、まず板書計画の作成。板書計画を基に授業を作る。

字に自信がない人のために

- 1 右上がりの法則
- 2 平行の法則
- 3 等間隔の法則



黒板にきれいな字を書くコツとして、「チョーク回しの術」があります。簡単に、常にチョークの角で書くことです。



服部英雄先生

発問の工夫
クラス全員が考えられるような発問を工夫することが求められる。その答えは、児童にとって、ズバリ「二択」です。
（例）国語「ごんぎつね」
（発問）「兵十がごんを撃った場面において、ごんは死んだのでしょうか、死んでいないのでしょうか」

二択にすることで、考えを持つことが苦手な児童にも、必ずどちらかの立場に立たせることができ、選んだ理由や考えを持たせることができます。また、「一択にすることで、ごんは撃たれたから死んだ」といった浅い読みを促しているのか、それとも、暫く眼を閉じたままだったか、それも死んだのではないかと、という深い読み取りを促しているのかを把握し易くなるのです。そして、児童が考えを持つことに慣れてきたら、少しずつ選択肢を増やしていきます。

（例）国語「ごんぎつね」
（発問）「ごんの気持ち」
わかる言葉は何でしょうか」
本文から言葉を選択する方法です。授業は単純な方がよい。二択の発問をすることで考えを持ちやすいし、子どもにとつてわかりやすいのです。

つまり、発問が単純化された授業は、教師と児童の双方にとって大きな利点があるといえます。（瀧綾、甲賀翔太）



編集後記

今回、初めてセミナー通信の発刊に携わり、編集委員一同、端的にまとめることの難しさを痛感しました。早く取材に応じていただいた日吉小学校の服部先生や授業実践開発、生徒指導実践開発コースの松本さん、高橋さんには、心より感謝申し上げます。今後、P1生向きに「教授対策」を、P2生向きに「実地研究校訪問」を、P3生には「直前研修」のシリアルズを取材し、掲載していきます。お楽しみに。今年のご愛読、ありがとうございます。来年もみなさんの期待に応えられるようがんばります。（瀧綾）